

## 平成 30 年度

### 社会福祉法人こころの種福祉会つくばトッポンチーノ保育園

#### 事業報告書

理事長 三上恵子

#### 平成 30 年度の総括

つくばトッポンチーノ保育園の 4 年目は、モンテッソーリ教育の理念が一層職員、利用者に浸透した年となった。日々の保育に加え、行事等多方面へ充実することができた。モンテッソーリ教育を実践していくことで子どもたちだけでなく、保育者にも「アクティブラーニング」の理解を深めることができた。

また就学前教育推進室の先生方の見学、地域小学校との保幼小連携教育研修会の開催にいたるなど教育を軸とした地域との関連が多くなり、大きな飛躍の年であった。以下に各報告をまとめる。

#### 1. 平成 30 年度概要

①保育事業計画にある内容をおおむね遂行できた。未満児の活動に関しては、安全に配慮しながら発達に即した活動、発達を促す活動を実践できた。以上児に関しては、モンテッソーリメソッドによって培われた「主体性」を活かした活動を展開できた。遠足などの行事に関しても園児の「考え」を十分に組み入れ、また計画などを園児が立てることもできた。子どもたちが「自分でできる環境」を整え、日々活動できた。

②家庭や地域との連携を大切にして「家庭教育」の補完をする。

乳幼児の保育に関する相談に応じ、保育園、保育者としての社会的役割を果たす。

- ・親子参加型のイベントを定期的に企画し、園児の成長を喜び合った。
- ・入園希望者、教育施設からの見学希望が多く、地域からの期待を感じた。
- ・地域のお店や会社とともに利用者のためのイベントを企画し、実行できた。
- ・日々の保育の内容を養護面に限ることなく、その日のモンテッソーリ教育内容の理解と興味につながるコメントやお知らせを昨年度に引き続き実施。平成 30 年度は全年齢において実施した。教育、保育の専門家の目線から送る文章は、子育てのヒントにもなり、好評を得た。HP のフォトギャラリーに日々の活動写真を例年通り無料で数百枚投稿し続けた。ダウンロードも無償であるため、こちらも好評であった。つくばトッポンチーノ保育園の可視化された教育を体感できるよう努めた。

③全年齢の園児は日本の保育基準を満たす中で整えられたモンテッソーリ教育の環境下で、自らの意思で自由に興味ある活動を選び、集中力をもって取り組みながら自分の意思通りに動く身体を育んでいく。

- ・職員は子どもの発達チャンス「敏感期」を逃さずに、知性と共に豊かな人格形成の下地となるよう「応答的環境」「自発的に動きやすい環境」を整えることに尽力した。また就学前教育を意識してアプローチカリキュラム、アプローチカリキュラムの実践に向けた保育を日々実行した。

④異年齢縦割りで学び合う経験を積極的に増やし、人間関係の基盤である思いやりを身につけ、責任感を育んでいく。コミュニケーションを楽しむことで問題解決能力を高め、児童は充実感に満たされるうちに「自分で考えて判断し行動できる」高い人間的資質を獲得していく。

- ・活動の大半で縦割り活動の実践をした。各年齢の保育士同士の連携を円滑にし、子どもの発達を個別に十分理解することで、縦割りの展開が可能となった。保育者は、きめ細かに物的環境を整えることを配慮し、子どもの敏感期を逃さず、安全に子ども同士が関わることができた。そのような環境が開園時より続いていることで子どもたちの中にも異年齢のかかわり、縦割りの意識が定着しており、自然に助け合う姿、尊重しあう姿が随所に見られた。

⑤児童の好奇心を尊重し、興味をもたせることで主体性を育んでいく。職員は連携し、モンテッソーリ教育の環境づくりを励行する。子どもの自立を促す自由かつ知的な環境を整え、子どもが自発的活動を行うための援助をする。

- ・公的業務が立て続く中で物的環境の整備は困難を極めるが、季節に応じて、発達に応じて過不足なく環境を整えることで園児をフレキシブルに活動させることができる。また発達に応じた環境設定を日々意識していくことで、保育者のスキル向上にも大いにつながった。職員間で協力しながら環境を整えることで会議などではできない「合意形成」も達成することができた。

当園の保育方針として子どもとの関わりを十分にとり、そして、「子どもの発達」にとって最適な環境づくりにこだわり、その力量を磨いていきたい。

- ⑥「食べること」は「生きること」。命をより良く生きるための姿勢を「食育」を通して身につけて行く。
- ・民間保育園協議会主催の「食育フォーラム」への参加。他園や他園の利用者の方々との交流は、励みや刺激となり、職員の意識向上にもつながった。
  - ・「自分で育てる、土に触れる、自分で収穫する」など体験型の食育を多々実践することができた。唐突にそれらの体験をさせるのではなく、入念な事前学習を行うことで、子どもたちに「命」「食べること」などを正しく伝えることができた。
  - ・「食育」として毎月きめ細かく課題を設け、子ども達の支えとなるよう研究と実践を重ねた。旬の食材の紹介はもちろん、身体を育むために必要な栄養素など、さまざまなアプローチをして子どもの好奇心と学びを支えた。
  - ・地産地消の実践として、地元産の小麦粉を利用した製麺所の協力を得て、プレミアムフライデー企画を実行しました。国を挙げてのプレミアムフライデーを有効に活用したく考えた行事です。夏の午後、子どもと家族でクッキングをし、家族の時間を楽しんでもらうことが趣旨でした。調理のプロと保育衛星のプロが協力し合い、おいしく、そして安全なクッキングを実現できたことは、参加者すべての誇りと言える内容となりました。

## 2. 当園の支援・研修

### ①在園家庭への支援

就学に向ける細部に至る発達課題のほか子ども達一人ひとりが前向きに人生を歩む自立に向けての成長を支えるためには家庭の支えは欠かせないもの。就労で多忙な毎日の中、幼児期のわが子とどのように接したらよいのか、具体的にどうしたら日々成長するわが子の養護ができるのか。すべてが子育ての不安要因にならないよう、少しでも「子育て」が励みとなる支援ができればと工夫をした。

当園では面談だけでなく、日ごろの送迎時にも十分なコミュニケーションをとるようにしている。日頃の成長を即座に話し合える環境を利用者に提供することができた。

また生活の細部にわたる情報を毎日 HP 上の保護者専用ページ上で活動写真を通じ、ライブ性をもって伝えてきたことから、心情・意欲・態度がバランスよく発達していることを喜ぶ保護者・在家庭の姿が引き続き見受けられた。個別の面談などを適時希望者に行ったりした。そのような積み重ねから「感染症対策」「安全対策」などの点で必要物の準備や駐車場ほか園舎周辺の行動などの見直し等、保護者のご協力を仰ぐことができるようになっていく。

保護者と共に子どもの発達を理解し、子どもたちを等身大で支えられるように連携を良くし、職員同士も子ども一人ひとりを正しい共通認識のもとに支えられるような関係づくりがかけがえのない保育現場の支えの要素となっている。

## ②職員の研修

保育士不足の真ただ中にある現在安定した施設運営をするための人材確保の必要性、長期的視点にたった有能な職員の育成が課題である。社会福祉法人職員としての自覚と行動、さらにつくばトッポンチーノ保育園職員としての保育の技術及び知識の強化・向上、品格の保持などを目指した研修設定を行っている。しかしながら多忙な職務の中で、現場で伝え合うことはもちろん、専門性を高める学びを続けるために時間を割くことは大変困難ではある。そこで職員の小グループを構成し、幾度も場を設け、職員全員が同じレベル・質の学びが果たせるように運営努力している。昨年度よりの課題であった「コンセンサスをとること」「幼児におけるアクティブラーニングの獲得」などの目標をもち、日々の業務にあたった。しかしながら四月時点で充足していた職員数も年度が進むごとに減少してしまい、日常業務の達成で精一杯の時期もあった。利用者の最善の利益を守ることを使命や職業人として研鑽する意志をもちながらも時間的、物理的難題により打開できなかった点もある。現実問題と向き合いながら今後も研修内容の充実、研修時間の確保などの目標を、日常保育業務を遂行しながらしっかりと果たしていきたい。

## 3. 苦情解決のうち報告すべき事項

- ・平成30年度、苦情解決委員（第三者委員）への相談はありませんでした。